様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２２ 日現在

機関番号：３２５１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３５０８

研究課題名（和文）共通語としての英語（ELF）使用実態を踏まえた教育実践に関する質的調査と教育提言

研究課題名（英文）A qualitative inquiry into the effect of ELF (English as a lingua franca) -informed instruction and its pedagogical implications

研究代表者
小中原　麻友（Konakahara, Mayu）

神田外語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：８０５８０７０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：ELFの使用実態を踏まえた教育実践（INS）が日本人大学生にもたらす教育効果を、受講者を対象とした学期中の言語態度調査と、3名の協力者を対象とした学期後の言語態度調査およびELFでの会話の録音調査に基づく追跡調査の二つの調査を通して、質的に検証した。収集データの分析の結果、多くの受講生の英語に対する言語態度を単一言語的なものから複数言語的なものへとELF志向的に変化させ、INS受講後も3名の協力者のELF志向的な言語態度を一定程度維持、あるいは強化していたという点において、INSには、一定の長期的教育効果が認められたが、その一方で日本社会における英語母語話者信仰の根深い影響も明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は次の２点において学術的に意義深い。第一に、学期前後での学生の英語に対する言語態度の変化を比較した既存研究はあるが、本研究では学期中の学生の言語態度の変遷過程を詳細に追い、具体的にどのような講義内容が学生の言語態度の変化に作用したと考えられるかを検証した。第二に、留学中の学生の言語態度やアイデンティティーの変遷を調査した既存研究はあるが、世界諸英語やELFに関する知識や視点を得た学生のその後の言語態度の変遷を明らかにした研究はまだなく、本研究はこの研究の空白を埋めるものである。本研究で得られた知見は、グローバル化に即した英語教育に示唆を与えるものであり、この点において社会的にも意義深い。

研究成果の概要（英文）：This research qualitatively examined the educational effect of ELF-informed instruction on Japanese university students' attitudes toward English and their actual language use through two types of studies: the language attitude study during the instruction and the follow-up study after the instruction. The latter was particularly conducted as case studies of three informants, exploring their language attitudes through the subsequent ELF experiences and their actual language use in ELF interaction. The analysis of the data revealed a certain degree of the positive educational effect of the instruction. Specifically, the instruction changed the students' language attitude toward English from monolingual to multilingual. It also maintained or enhanced the three informants' positive attitudes toward English through the subsequent ELF experiences although it also disclosed the deep-rooted negative influence of native-speakerist view of English pervasive in Japanese society.

研究分野：会話分析、語用論、社会言語学、応用言語学

キーワード：共通語としての英語　長期的教育効果　言語意識　言語使用　コミュニケーション方略

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

グローバル化の進展と共に、国際コミュニケーションの場において、社会的、学術的、ビジネス等の目的のために英語が共通語（English as a lingua franca, ELF）として使用されることが、高等教育やビジネスの分野でも益々増えている。一方、ELF の研究分野、特にその語用論的記述研究では、ヨーロッパやアジアでの実際の会話の録音調査によって ELF 使用の実態把握が進み、多様な言語文化背景出身の ELF 使用者が、母語話者の英語の規範から「逸脱」しながら、多様な言語・非言語資源を語用論的方略として効果的に使用し、相互理解と人間関係の構築を成功裏に達成する過程が解明されてきた(e.g., Jenkins et al. 2011)。しかし、このような ELF 使用機会の増加と ELF コミュニケーションの実態とは裏腹に、日本を含む各国の英語教育や大学の国際化は、依然として「母語話者（native speaker, NS)」の英語を規範にした単一言語的な英語観に基づいて行われる傾向にある（村田他 2017)。アメリカ英語やイギリス英語のみを「正当な英語」として認識する英語母語話者信仰（native-speakerism）（Holliday 2006）の傾向が日本社会全体に深く浸透していることは、日本人学生の言語態度からも明らかであり(e.g., Chiba et al. 1995）、「NS らしさ」を優先することにより（Tokumoto & Shibata 2011)、言語形式の正確性や NS の英語の発音に過度に囚われ、英語の苦手意識へもつながっている様子が窺える。

グローバル化に即した人材育成を行うには、多様な言語文化背景の出身者と自信を持って意思疎通を図ることができる言語態度や英語コミュニケーション能力を育成する英語教育が不可欠であり、これには、世界の英語（World Englishes, WE）の分野で調査されている地域の社会的要因に関連して多様化した英語変種（e.g., Kirkpatrick 2007）や、ELF の分野で解明されている変種を越えて行われる ELF 使用実態を踏まえた教育実践が必須である共に、そのような教育実践の効果検証の実施（e.g., Galloway 2017）も急務である。

２．研究の目的

前述のような背景を受け、本研究では、WE や ELF 使用実態に関する教育実践（instruction, INS）がもたらす教育効果を、主に日本人大学生の言語意識の変遷過程と、実際の ELF コミュニケーションでの言語使用の 2 点に焦点を当てて、質的に調査することを目的とした。特に、INS の長期的な教育効果を検証した既存研究がほとんどないことを受け、（１）学期中の INS に伴う言語態度の変遷を調査することに加えて、（２）学期終了後に数名を対象に追跡調査も実施し、対象学生の英語に対する言語態度と英語で意思疎通を図ろうとする態度、それに伴う実際の言語使用が、INS 後にどのように変化するか（しないのか）を質的に詳細解明することで、WE や ELF に関する知識のその後の ELF 経験での有用性を探り、グローバル化に対応した英語教育への具体的提言を行うことを目指した。

３．研究の方法

前述の研究目的の達成のため、本研究では、（１）教育実践に伴う言語態度調査と、（２）教育実践後の追跡調査を実施した。

（１）教育実践に伴う言語態度調査：2017 年度の前期から 2020 年度後期まで、自身が担当する WE や ELF に関する専門科目の授業（後述）の履修者を対象として、英語に対する言語態度調査を実施した。前期は A 大学と B 大学でそれぞれ１クラスずつ、計２クラスの授業を担当し、後期は A 大学で１クラス授業を担当した。該当の授業で取り扱ったトピックの詳細については、表１を参照されたい。

表１．WE や ELF に関する専門科目の授業で取り扱ったトピック一覧[1]

No.	取り扱ったトピック
1	世界における英語使用や英語使用者に関する数的情報
2	人々や言語に対するグローバル化の影響：人口統計学的情報と言語景観など
3	第一言語や英語母語話者、母語としての英語などの伝統的概念の実態と再考
4	英語の地球規模での普及：その歴史と言語使用者の agency
5	世界における多様な英語のアクセントのリスニング
6	内部圏、外部圏、拡張圏における英語変種の背景とその言語的特徴
7	植民地支配の負の遺産：標準英語イデオロギーと英語母語話者信仰
8	ELF コミュニケーションの性質：流動性と多言語性、効果的コミュニケーション方略

[1] 各授業で表１のトピックをどのような順番で、どのような授業活動の形式で、どの程度深く扱ったかは異なる。2017 年度前期と 2018 年度前期に A 大学で実施した授業では、トピック７については簡単に言及するのみで、明示的には取り扱わなかった。

各クラスの情報提供者数については、紙面の都合上、ここでは、本報告書で調査結果を後述する 2017 年度のもののみを報告する。前期は 30 名（A 大学：23 名、B 大学：7 名）、後期 18 名（A 大学のみ）の計 48 名が調査に参加した。情報提供者の同意を得た上で、学期開始時の導入アンケートに対する回答や、学期中に実施した中間レポートや期末レポートの回答を書面形式で収集した。導入アンケートでは、英語に対するイメージや目指す英語について質問し、加えて、自身の英語、クラスメイトの英語、教員一般の英語についてどのように感じるか質問した。中間レポートや期末レポートでは、授業内容の理解度を図ることに加え、その時点における英語に対する考えや感情を書いて貰った。収集した回答は質的分析ソフトを使用して、その内容を質的に分析した(Schreier 2012)。

（２）教育実践後の追跡調査：学期終了時に、授業の履修者に声を掛け、追跡調査への参加者を募った。継続的に調査に協力したのは、2017 年度前期の履修者だった 2 名（仮名：Yui と Chie）と 2018 年度前期の履修者だった 1 名（仮名：Sana）の 3 名のみであり、この 3 名に焦点を当てて追跡調査を進めた。調査では、主に（１）オンライン日誌を使用した言語態度調査と、（２）実際の ELF での会話の録音調査の２つを実施した。これに加え、INS 実施の４年後に、言語態度調査の補足データとして、半構造化インタビューもオンラインで実施した。オンライン日誌には Google ドキュメントを使用し、調査参加者らには、授業で学習した内容を念頭に、日常生活における実際の英語使用体験や英語に関する出来事を振り返り、「英語」について感じたことや考えたことを、具体的なエピソードと共に自由に書いてもらった。また、録音調査は、調査参加者自身による録音と、研究代表者がセッティングした留学生との 90 分程度の会話録音セッションへの参加の二つの形式を採用した。日誌とインタビューの回答データは、質的分析ソフトを使用しながら、その内容を質的に分析した(Schreier 2012)。録音データについては、その内容を大まかに文字に起こしたのち、会話分析(conversation analysis, CA; Sacks, Schegloff & Jefferson 1974)の視点から興味深い現象が観察される箇所に焦点を当て、その意味交渉過程のシークエンスを、CA 的手法を用いて詳細に分析した（紙面の都合上、収集データの詳細については後日論文で発表する）。

４．研究成果

本項では、教育実践に伴う言語態度調査と教育実践後の追跡調査の研究成果について簡潔にまとめる。

（１）教育実践に伴う言語態度調査：紙面の都合上、ここでは、2017 年度の収集データの分析を中心に報告するが、それ以降の出たでも同様の傾向が観られる。学期中に収集したデータの内容を質的に分析した結果、WE や ELF 使用実態に関する教育実践は、情報提供者である日本人大学生の英語に対する言語態度に、肯定的な変化を一定程度もたらしたことが明らかになった。

学期開始時、多くの学生は、標準英語（特にアメリカ英語）を「正しい」とする単一言語的な英語観を持っていた。そのことにより「正確さ」や「NS らしさ」を肯定的に評価する一方で、それとは異なる自分や教員の英語を低く評価する傾向にあった。英語の第二言語使用者数が多いことに対する気付きがあり、メッセージを伝えることを重要視する意見を持つ学生もいたが、自分の日本語アクセントのある英語についてはやはり低く評価していた。しかし INS を通して、特に、前出の表 1 にあるトピック１、３、６、７、８の５つのトピックについての理解を深めることで、多くの学生の英語に対する言語態度と英語コミュニケーションに対する態度は、ELF 志向的に変化した。英語使用や英語使用者に関する数的情報（トピック１）を得たり、第一言語や英語母語話者、母語としての英語の実態を知りそれら伝統的な概念を再考することで（トピック３）、学生は英語変種間の平等を主張したり、英語母語話者の英語の習得を目指すことに疑念を持ち始めたりした。また、英語変種の背景とその言語的特徴（トピック６）についての知識を得ることで、自分の英語に対する自信がついたと述べる学生もいた。

トピック１～６まで学んでなお、日本語アクセントの英語が通じない自身の経験をもとに、標準アメリカ英語や容認発音などの英語の発音を最も効果的なモデルと考える学生もいた。しかしそのような学生も含め、標準英語イデオロギーや英語母語話者信仰（トピック７）を盲目的に信じることの危険性、特に言語差別に繋がる可能性を理解すると、「非標準英語」に対する今までの自分の態度を省みて、より批判的な言語態度を持つようになった。さらに、ELF 場面において相互理解の達成のために多様な言語・非言語資源が語用論的方略として巧みに使用されている実態（トピック８）に学生の意識を向けると、多くの学生は、異文化間コミュニケーションを成功裏に達成する鍵が「NS らしさ」ではないことを理解し、言語使用の調整スキル（accommodation skills）による相互理解の達成に重きを置くことに価値を見出だし、自分のコミュニケーションにおける語用論的方略の使用にも目を向けるようになった。このことにより全ての学生が、自分の英語コミュニケーションを肯定的に評価するようになったわけではないが、メタ語用論的知識に基づき自分の英語や英語コミュニケーションでの振る舞いを客観的かつ分析的に見る視点を得たことは、少なくとも、学生がその後の ELF 経験においてさらに進んだ学習をする際の軸や手がかりとなるのではないか(Widdowson 2003 の a capability for further learning を参照)と考えられる。

（２）事例研究――INS 中の言語態度と追跡調査中の言語態度と言語使用：学期中、および学期終了以来収集してきたデータの内容を質的に分析した結果、INS には長期的な教育効果が一定程度あることが認められた。しかし、その教育効果には個人差があり、特に Yui の言語態度については、日本社会にある英語母語話者信仰の根深い影響が見られた。紙面の都合上、それぞれの事例の詳細な分析については後日論文として発表し、ここでは、3 名の事例の共通点と相違点のみを報告する。

いずれの調査協力者も、INS を通して ELF 志向的な言語態度に一定程度変化し、INS 受講後の ELF 経験においても、この ELF 志向的な言語態度は、ある程度維持、あるいは強化されていた。例えば、英語使用者の実態や英語の多様性（前出表１のトピック１、３、６）についての理解は、INS 受講後、英語変種や英語使用者の多様性に対する寛容や関心として日誌やインタビュー回答に表出していた。実際の ELF 場面において多様な英語変種のアクセントを経験し、最初は驚いたり分かりづらいと感じたりしても、その変種の話者との会話の機会を重ねるにつれ、次第に慣れて分かるようになるという経験を 3 名全員がしていた。また、実際の ELF 会話の経験を通して、文法的正しさや NS らしさよりも、伝えることが重要であること（トピック８）を実感したという回答も 3 名の日誌やインタビューに見られた。聞き直し、言い換え、自己反復、確認要求や説明要求、発話補完、見過ごす方略などの様々な語用論的方略の使用についても日誌で報告され、実際の会話の録音データ中にもその使用が観察された。一方、他者の英語母語話者信仰的な英語観に対するスタンスは、調査協力者間で多少異なった。Sana の日誌にはそのような記述自体が見当たらなかったが、Yui と Chie の日誌には、他者のそのような英語観から距離を置いていることが分かる記述があった。特に Chie は、3 名の協力者の中で一番批判的な視点を持ち、英語変種について揶揄するような他者の態度を問題視していた。Chie が受講した INS のみで標準英語イデオロギーや英語母語話者信仰の問題点（トピック７）について明示的に扱った点を考慮すると、英語に対するより批判的な視点を培うには、英語母語話者やその英語の定義について再考する（トピック３）だけではなく、トピック７についても明確に扱う必要性があると考えられる。

さらに、目指す英語や自身の英語の評価に関する回答を分析すると、英語学習者としてどのような経験をしてきたか、および INS 後の英語使用機会が多いか否かで、肯定的な評価をするか否かが異なることが分かった。英語学習者として成功体験を重ね、留学や日本での異文化交流の経験から学期開始時から伝わることを重視し、現在も英語を私生活で日常的に使用する Chie や仕事で英語を日常的に使用する Sana は、INS 受講４年後のインタビュー時も、英語を意思疎通のツールと認識し、NS の英語を基準に自身の英語を低く評価することはなかったし、NS の英語を目指す英語とすることもなかった。反対に、昔から自身の英語の発音に劣等感を抱き、学期開始時から英語母語話者信仰的な英語観が強く、現在、英語を使用する機会があまりない Yui は、INS と留学中の ELF 経験により伝わることを重要視し始めたものの、劣等感は消えず、INS 受講４年後のインタビュー時、日本社会の英語母語話者信仰を根拠に、白人系アメリカ人の英語を目指すとした。これらの調査結果は、自分の英語に対する肯定的な言語態度と ELF 志向的なコミュニケーション態度を育成するには、ELF 使用実態に基づく英語教育を早い時期から実施することと、ELF 環境下での英語使用機会を継続的に持つことが必要であることを示唆していると考えられる。

（３）結論――教育的示唆と今後の課題：調査の結果、INS には一定の長期的教育効果が認められるが、大学での半期の INS のみで、ELF 志向的な肯定的な言語態度とコミュニケーション態度を育むには限界があることが明らかになった。具体的には、INS を通して、全員ではないものの多くの学生の英語に対する言語態度は、単一言語的なものから複数言語的なものへと変化した。多様な英語変種を否定せずに受容的になり、英語の正しさより伝えることを重視するようになり、自身の言語使用（語用論的方略の使用）に対しても分析的な視点を得て敏感になった。INS で扱ったトピックのうち、前出の表１のトピック１、３、６、７の５つが学生の言語態度に一定程度肯定的な影響を与えたと考えられた。これらのトピックの理解は、学期終了後の追跡調査に参加した調査協力者の日誌やインタビュー回答にも、多様な英語変種に対する肯定的な評価や興味関心、言語形式的な正しさより伝えることを重視するコミュニケーション態度などとして表出しており、INS 後の ELF 経験において協力者らは、ELF 志向的な言語態度を一定程度維持、あるいは強化していることが分かった。実際の ELF 経験を通して、多様なアクセントに対する慣れを経験したり（3 名）、正しさに対するこだわりが和らいだり（Sana）、英語母語話者信仰的な他者の態度を問題視したり（Chie）、そのような英語観から距離を取ったり（Yui）もしていた。また、確認要求や説明要求、聞き直しや言い換え、発話補完や見過ごす方略など、多くの語用論的方略が効果的に使用され、相互理解が成功裏に達成されている様子が実際の ELF での会話の録音データにも確認された。特に Yui については、時の経過とともに多言語資源を自由に使用する様子も観察された。

しかし一方で、継続的な ELF 経験の重要性と英語母語話者信仰の根深い影響も明らかとなった。長年、自身の英語の発音に対する劣等感を抱いてきた Yui は、INS を通して、自分の英語の発音を「日本人らしさ」と捉えたいと考えるようになったものの、INS 後の ELF 経験において、自身の英語の発音が通じなかったり、海外の友人から発音レッスンを受けたりした。そのような経験に加えて、日本社会に広がる英語母語話者信仰的な英語観の影響や、卒業後の ELF

場面での英語使用機会の減少を受け、発音に対する劣等感は消えるに至っていない。INS 受講 4 年後のインタビューで Yui は、海外にいる場合は伝わることを重視するが、日本や日本人が多い場面では、白人系アメリカ英語を目指したいと回答した。

本研究の調査結果を踏まえると、言語形式の正しさや NS の発音の習得を目指す NS 規範の英語教育が、日本人学生の英語に対する言語態度やコミュニケーション態度に及ぼす否定的な影響を軽視することはできない。大学での専門教育で WE や ELF について扱うことも、教員教育の観点からも重要であるが、それだけでなく、ELF 志向的な視点も取り入れた英語教育をもっと早い段階で行う必要があると考えられる。NS 規範を抜本的に変える必要はない。言語活動によって、正しさや NS らしさではなく、「通じる」「伝える」ことに焦点を当て、その点を評価項目に入れることができると考えられる。発音も、NS の英語への類似性ではなく、「伝わるか」を基準に評価することが望ましい。そのことにより、自身の発音に対して過度な劣等感を持つ学習者を生み出すことを避けることができると考えられる。NS 以外の英語をリスニング教材として取り入れたり、実際の ELF 体験を言語活動に取り入れたりすることも重要である。地道な活動にはなるが、前述のような ELF 志向的な視点を取り入れた英語教育を続けていき、日本社会にある英語母語話者信仰的な英語観を徐々にでも変えていく努力をすることも必須である。

一方で、今後の研究課題もある。第一に、本研究では、日本人大学生の言語態度の変遷過程と実際の ELF での会話での言語使用の 2 点を質的に検証することを目指したものの、後者については、時の経過に伴う変化を詳細に解明するには至らなかった。多くの録音データを収集することができた Yui のデータには、時の経過と共に、会話参加者らが、多言語資源を自由に使用する様子が観察されたが、他の 2 名の録音データについては、データ数も少なく、そのような様子を観ることは叶わなかった。今後は Yui の録音データをさらに詳細に分析すると同時に、将来的には、同じ話し相手との ELF での会話を長期に渡って録音し、特定の言語資源の使用が時の経過に伴って変化するかどうか、変化する場合はどのように変化するかを調査することも検討したい（e.g., Pekarek Doehler et al. 2018）。第二に、本研究は、INS の長期的な教育効果を明らかにするために 3 名の事例研究を実施したが、将来的には、もう少し協力者数を増やすと同時に、INS 受講者と非受講者の言語態度を比較することにより、INS の効果検証を実施することも検討したい。また、本研究では、協力者が留学や日本での異文化交流、仕事での ELF 経験を通して、どのような人間関係のネットワークを構築し、それが彼女らの英語観やアイデンティティにどのような影響を及ぼしたかなど（e.g., Nogami 2020）については精査できていない。将来的には、このような INS 以外を通して得られる知識や経験が調査協力者にどのような影響を及ぼすかについても考慮する必要があるであろう。

以上のような課題が確認されたが、本研究では、その規模は小さいものの、既存研究では明かされていなかった INS の長期的な教育効果を質的に検証、WE や ELF に関する知識のその後の ELF 経験での有用性やその範囲を解明し、グローバル化に対応した英語教育への具体的な提言を行った。

＜引用文献＞

Chiba, R., Matsuura, H., & Yamamoto, A. (1995). Japanese attitudes toward English accents. *World Englishes*, *14*(1), 77-86.

Galloway, N. (2017). *Global Englishes and change in English language teaching: Attitudes and impact*. Routledge.

Holliday, A. (2006). Native-speakerism. *ELT Journal*, *60*(4), 385-387.

Jenkins, J., Cogo, A., & Dewey, M. (2011). Review of developments in research into English as a lingua franca. *Language Teaching*, *44*(03), 281-315.

Kirkpatrick, A. (2007). *World Englishes: Implications for international communication and English language teaching*. Cambridge University Press. http://www.loc.gov/catdir/enhancements/fy0808/2008295018-d.html

Nogami, Y. (2020). *Identity and pragmatic language use: A study on Japanese ELF users*. De Gruyter Mouton.

Pekarek Doehler, S., Wagner, J., & González-Martínez, E. (2018). *Longitudinal studies on the organization of social interaction*. Palgrave Macmillan.

Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, *50*(4), 696-735.

Schreier, M. (2012). *Qualitative content analysis in practice*. Sage.

Widdowson, H. (2003). *Defining issues in English language teaching*. Oxford University Press.

村田久美子・飯野公一・小中原麻友．(2017)．EMI（英語を媒介とする授業）における「共通語としての英語」の使用の現状把握と意識調査、および英語教育への提言．『早稲田教育評論』，*31*(1)，21-38.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Mayu Konakahara	４．巻 170
２．論文標題 Single case analyses of two overlap sequences in casual ELF conversations from a multimodal perspective: Toward the consideration of mutual benefits of ELF and CA	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Pragmatics	６．最初と最後の頁 301～316
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.pragma.2020.09.024	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村田久美子・小中原麻友・飯野公一・豊島昇	４．巻 33(1)
２．論文標題 EMI 参加に伴う学生の ELF への意識変化と ELF 使用へのビジネスピープルの意識差の調査と英語教育への示唆	５．発行年 2019年
３．雑誌名 早稲田教育評論	６．最初と最後の頁 19-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kumiko Murata, Tomokazu Ishikawa, and Mayu Konakahara	４．巻 8
２．論文標題 Introduction: ELF and applied linguistics - broadening a perspective	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Waseda Working Papers in ELF	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 村田久美子，小中原麻友，飯野公一，豊島昇	４．巻 32(1)
２．論文標題 EMI（英語を媒介とする授業）とビジネス現場における「共通語としての英語」への意識調査、および英語教育への提言	５．発行年 2018年
３．雑誌名 早稲田教育評論	６．最初と最後の頁 55-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Mayu Konakahara	4．巻 6(2)
2．論文標題 Interactional management of face-threatening acts in casual ELF conversation: An analysis of third-party complaint sequences	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Journal of English as a Lingua Franca	6．最初と最後の頁 313-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/jelf-2017-0015	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Mayu Konakahara, Kumiko Murata, and Masakazu Iino	4．巻 6
2．論文標題 From academic to business settings: Changes of attitudes towards and opinions about ELF	5．発行年 2017年
3．雑誌名 Waseda Working Papers in English as a Lingua Franca	6．最初と最後の頁 129-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 村田久美子・飯野公一・小中原麻友	4．巻 31(1)
2．論文標題 EMI（英語を媒介とする授業）における「共通語としての英語」の使用の現状把握と意識調査、および英語教育への提言	5．発行年 2017年
3．雑誌名 早稲田教育評論	6．最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計16件（うち招待講演　4件／うち国際学会　12件）

1．発表者名 Kumiko Murata, Mayu Konakahara, and Tomokazu Ishikawa
2．発表標題 Teachers’ and business people’s attitudes in contrast: Report on questionnaire results
3．学会等名 The 4th and 5th ELF SIG International Workshop（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Japanese university students’ attitudes toward English: Before and after learning about ELF
３．学会等名 Sociolinguistic Symposium 24（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Tackling a monolingual view of English among Japanese university students through ELF-informed instruction: What, how, and afterward
３．学会等名 JALT Kyoto: Teaching Global Englishes（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Transforming Japanese university students’ attitudes towards English: The impact of ELF-informed academic content courses
３．学会等名 The 3rd Workshop English as a Lingua Franca (ELF): Practices and Possibilities（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Negotiating mutual understanding by disagreeing: An analysis of unmitigated disagreement in ELF interactions
３．学会等名 The 16th International Pragmatics Conference (IPrA2019)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Exploring epistemological expansions of ELF: Integrating multimodality and rethinking cooperativeness in ELF pragmatics research - Multimodal interactional analysis of third-party complaint sequences in casual ELF conversation
３．学会等名 2019 conference of the American Association for Applied Linguistics (AAAL)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 How do Japanese students develop their attitudes towards English through and after ELF-informed instruction?: An interim report of longitudinal research
３．学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Multimodal analysis of ELF interactions: What can it give to CA and vice versa?
３．学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kumiko Murata, Masakazu Iino, Hajime Terauchi, and Mayu Konakahara
２．発表標題 Multilingual and translanguaging communication in Asian workplace settings: The role of ELF and local languages among multilingual business people in Asia
３．学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Incorporating World Englishes and English as a lingua franca perspectives to academic content classes
３．学会等名 広島修道大学ELF研修会－English as a Lingua Franca の理論と実践（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Fostering university students’ attitudes towards ‘English’ through ELF-informed instructions: An interim report
３．学会等名 The Japan Association of College English Teachers (JACET) 44th Summer Seminar
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mayu Konakahara
２．発表標題 Securing interpersonal relationships while disagreeing: An analysis of English as a lingua franca interactions among friends
３．学会等名 The 15th International Pragmatics Conference (IPrA2017)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Mayu Konakahara, Kumiko Murata, and Masakazu Iino
２．発表標題 Changing attitudes towards the use of English in business settings among young business people: A generation or/and education gap?
３．学会等名 The 10th International Anniversary Conference of English as a Lingua Franca（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kumiko Murata, Masakazu Iino, Mayu Konakahara, and Noboru Toyoshima
２．発表標題 Changing attitudes through ELF experience in business and EMI settings
３．学会等名 The 3rd EMI-ELF Workshop（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kumiko Murata, Masakazu Iino, Mayu Konkahara, and Noboru Toyoshima
２．発表標題 ELF experience in academic and business settings: Changes of attitudes
３．学会等名 The 2nd EMI-ELF Workshop（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 小中原麻友
２．発表標題 グローバル化社会で求められる英語コミュニケーション能力とは：共通語としての英語の視点より
３．学会等名 異文化間コンフリクトと倫理（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計6件

１．著者名 Mayu Konakahara	４．発行年 2023年
２．出版社 De Gruyter Mouton	５．総ページ数 245
３．書名 Conflict talk in English as a lingua franca: Analyzing multimodal resources in casual ELF conversations	

1．著者名 Mayu Konakahara	4．発行年 2023年
2．出版社 Candlin & Mynard ePublishing	5．総ページ数 25
3．書名 Case studies of two Japanese university students' attitudinal development and language use after ELF-informed instruction. In G.P. Glasgow (Ed.). Multiculturalism, language, and race in English education in Japan: Agency, pedagogy, and reckoning (pp. 156-181)	

1．著者名 Mayu Konakahara and Keiko Tsuchiya	4．発行年 2020年
2．出版社 Palgrave	5．総ページ数 22
3．書名 Introduction: English as a lingua franca in Japan - Towards multilingual practices In M. Konakahara & K. Tsuchiya (Eds.), English as a lingua franca in Japan: Towards multilingual practice. (pp. 1-23)	

1．著者名 Mayu Konakahara	4．発行年 2020年
2．出版社 Palgrave	5．総ページ数 27
3．書名 From "English as a native language" to English as a lingua franca: Instructional effects on Japanese university students' attitudes towards English. In M. Konakahara & K. Tsuchiya (Eds.), English as a lingua franca in Japan: Towards multilingual practice. (pp. 183-210)	

1．著者名 Kumiko Murata, Masakazu Iino, and Mayu Konakahara	4．発行年 2019年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 22
3．書名 Realities of EMI practices among multilingual students in a Japanese university. In Jenkins, J. and A. Mauranen (Eds.) Linguistic Diversity on the International Campus. (pp. 149-171)	

１．著者名 Mayu Konakahara, Kumiko Murata, and Masakazu Iino	４．発行年 2019年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 18
３．書名 ‘English’-medium instruction in a Japanese university: Exploring students’ and lectures’ voices from an ELF perspective. In Murata, K. (ed.) English-Medium Instruction from an English as a Lingua Franca Perspective: Exploring the Higher Education Context. (pp. 157-175)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関